

■ リサーチコンペ研究成果 ■

◆ 研究ノート ◆

承認に関する意識の基礎的検討

－世代間の差に注目して－

智 原 あゆみ*

1. 問題の所在

1.1. 問題の背景

近年、現代日本社会の問題を語る際のひとつのキーワードとして、「承認」という言葉が注目を集めている¹⁾。承認の概念は、2000年代後半以降の日本社会において、社会問題、とりわけ若者の問題を考察する際に重要な概念として取り上げられてきた。2008年に秋葉原で発生した無差別殺傷事件では、その一要因として他者からの承認の欠如があったとの指摘（大澤 2008）がなされ注目を浴びた。さらに犯罪の要因としてだけではなく、若者の労働に関しても、そこには経済的な格差の問題だけではなく承認を得る機会が少ない「承認格差」が存在するとの指摘（萱野 2007）がなされた。このように、承認の概念は私たちにとって身近な問題においても注目されていると捉えることができるだろう。

しかし、上記のように承認は日本社会の若者をめぐる問題として取り上げられているものの、それらが他世代と比較した上で若者特有の問題であるのか、それとも全世代に関わるような問題であるかについては、実証的な検討は十分に行われていない²⁾。承認の問題と世代との間に関連があるのかどうかを捉えるには、人々が他者からの承認を感じているかを測定し、それらの分布が世代ごとに異なるのか、さらには他の社会的な属性等の影響を統制した上でも世代との関連がみられるかどうかを検討していく必要がある。

本稿では、承認に関する問題と現代社会との関連を明らかにする手法として計量的なアプローチを用い、基礎的な検討に取り組む。先行研究において指摘される承認の問題と世代との関連が実証

* 関西学院大学社会学研究科博士課程後期課程

- 1) 本稿では言及しないが、承認に関する議論は1990年代初頭から社会哲学の分野を中心として行われており、そこではジェンダーやエスニック・マイノリティ等の事例を取り上げながら特定の集団への権利付与をめぐる制度としての承認の問題（Taylor 1994=1996; Fraser 1997=2003; Fraser und Honneth 2003=2012）を中心として議論が蓄積されてきた。今後研究を進めていくにあたっては、日本社会での議論のみではなく、社会哲学分野における議論の蓄積も踏まえた上で、現代日本の承認の問題を検討していく必要がある。
- 2) 承認に関する意識の実証的な検討の試みとして、A. ホネットの承認のモデルを計量的なアプローチを用いて分析した源氏田憲一（2013）の研究が挙げられる。その際にはホネットの承認のモデル（愛・法・連帯）を操作化し、それぞれの承認のモデルに対して多変量解析が行われている。その結果、全てのモデルにおいて学歴・世帯年収が高いほど承認を得ていること等が明らかにされている。

的にも支持されるのかを検証し、現代日本社会における承認に関する意識の手がかりを捉えることを試みる。

1.2. 承認に関する意識の操作化の試み

本稿の目的は、人々が承認を感じているかどうかを測定し、承認に関する意識に世代による差が見られるかを実証的に検討することである。そのために、本稿では承認に関する意識を質問文の形式で調査対象者に尋ね、その回答データの分析を行う質問紙調査の手法を用いた検討を試みる。そこで、本項では、承認に関する意識を質問文の形式にするにあたっての操作化の手続きに関して説明を行う。

まず、本稿では人々の承認に関する意識を測定するために、承認の行為をどの視点から捉えるのかを明確にする必要がある。承認とは、他者との間で成り立つ行為であり、それは行為者自身が誰かを承認する側にも、反対に誰かに承認される側にもなりうるということである。承認という行為にはこのような両方の立場があり得るが、本稿での関心は「人々が実際に他者からの承認を感じているかどうか」であり、承認の行為のうち、「他者から承認される」ということをどの程度感じているのかという、承認される側の側面を質問文を用いて測定していく必要がある。そこで、本稿では調査対象者が「他者からの承認を感じているかどうか」に注目し、その程度を尋ねるための質問文を作成する。

さらに、承認という言葉は学問分野においてはさまざまな分野の議論において用いられるものの、私たちの日常生活の中ではあまり使用しない言葉である。そのため、「承認」という言葉遣いでは調査対象者に質問の意図を伝えるのが難しいことが予想される。そこで、承認という言葉进行操作化し、調査対象者により本稿における承認という言葉の意図が伝わるよう日常的な言葉に置き換えることを試みる。操作化するにあたっては、承認に関する先行研究³⁾にもみられる誰かから「受けいられる」という表現が、承認という言葉私たちの日常の感覚に置き換えるにあたり意味の近い言葉の一つであると考えられる。そこで、本稿においては、他者から「承認される」という状態を他者から「受けいられる」と操作的に定義した上で議論を進める。

さらに、承認という行為はすでに言及したように、承認する側とされる側が存在することによって成り立つ行為であり、承認されるといった状態を考える際にも、承認してくれる相手との関係性は重要な点であると考えられる。そこで、本研究では他者からの承認を考える際に承認してくれる相手との関係性に注目した上で、承認のモデルの類型化に取り組む。

私たちが日常生活を送る中では、比較的距離の近い親密な人々との関係、またそれ以外の比較的距離の遠い社会一般の人々との関係の両方が存在すると考えられ、人々からの承認に関しても、相手との関係性によって私たちにとっての感じられ方が異なると考えられる。そこで、本稿では日常生活におけるこれらの人間関係を区別し、前者の比較的距離の近い親密な人々からの承認を「周囲

3) 萱野は、社会で人々が生きていくにあたり、「自分の存在に意味をあたえたり、その価値を証明したりすることは、けっして自分ひとりだけではできません。他者から受けいれられたり、必要な存在だと思われたり、承認されたりすることで、はじめてそれは可能になるのです」(萱野 2007: 55)と述べており、承認という言葉と近い意味に「受けいられる」という言葉を位置づけていると考えられる。

からの承認」、後者の比較的距離の遠い社会一般の人々からの承認を「社会からの承認」と定義した上で議論を進める。

このような承認の問題と他者との関係性に関する議論は、先行研究においても多様な議論がなされている。社会哲学分野における承認論の代表的な研究者である A. ホネットは、自身の承認のモデル（愛・法・連帯）において、承認をする相手との関係性にも注目しそれぞれのモデルでの「承認形式」を区別した上で議論を展開している（Honneth 2003=2014）。また、現代日本社会の事例に基づき承認の問題を議論した山竹伸二は、承認のモデルを提示する際に承認をする他者との関係性に注目し、愛と信頼の関係にある他者からの「親和的承認」、集团的役割関係にある他者からの「集团的承認」、社会的関係にある他者一般からの「一般的承認」の3つの類型⁴⁾に承認を区分している（山竹 2011）。これらの先行研究からも見られるように、他者との関係性は承認の問題において重要な視点であると捉えることができる。

最後に、本稿で議論する世代と承認に関する意識との関連については、先行研究においてフリーターやニートといった就労状況との関連や収入といった経済状況との関連が指摘（萱野 2007）されており、これらの問題は先ほどのモデルにおいては、親密な人々による「周囲からの承認」よりも、社会の中で自分自身がどのように受けいれられているのかという「社会からの承認」により深く関わる問題であると考えられる。そこで、本稿では、「周囲からの承認」と「社会からの承認」のうち、「社会からの承認」に焦点を当て、それらが世代によって差があるのかどうかを検討していく。

以上、本稿では本節で検討してきた分析枠組みを踏まえた上で、「社会からの承認」についての質問文を作成し、その回答の分析を通して実証的な検討を行っていく。次節では本稿で用いるデータの概要を説明し、3節では世代による社会からの承認の差の有無の検討、最後の4節においてこれらの分析結果を踏まえた上で今後の研究に向けた考察を行う。

2. 調査の概要

2.1. データの概要

分析に入る前に、本稿で用いるデータの概要を確認する。本稿で用いるデータは、「人びとの暮らしと対人関係に関する意識調査」として行われたウェブ調査によって得られたデータである。調査は株式会社メルリンクスに委託する形で実施した。調査対象者⁵⁾は20-69歳の男女であり、回収ケース数は600ケースとした。調査の実施期間は、2016年3月9日から3月14日であった。なお、今回の調査においてはウェブ調査を用いており、ウェブ調査では性別や年齢に関して回答者の属性に偏りが出ることが予想されるため、あらかじめ男女比と年齢構成は国勢調査⁶⁾の比率に近づ

4) 山竹の承認のモデルにおいては、「親和的承認」を行う「親和的他者」は愛と信頼の関係にある他者（家族、恋人、親友）、「集团的承認」を行う「集团的他者」は集团的役割関係にある他者（学校の級友、職場の同僚）、「一般的承認」を行う「一般的他者」は社会的関係にある他者一般の表象である（山竹 2011）と述べている。

5) 本調査の調査対象者は、ウェブ調査の実施を依頼した（株）メルリンクスのモニターである。

6) 本調査では、平成27年9月1日現在の日本人人口の比率（総務省統計局）に基づいて割付を行った。

表 1 回答者の基本属性 (%)

年齢	就労状態	
20-29 歳	15.7 正規雇用	40.0
30-39 歳	19.3 非正規雇用	20.5
40-49 歳	22.8 自営・家族従業者	10.4
50-59 歳	19.3 無職（仕事を探している）	3.2
60-69 歳	22.8 無職（仕事を探していない）	24.3
性別	その他	
男性	50.2 居住地域	
女性	49.8 都市部	53.5
	非都市部	46.5
N=600		

ける形で割り当てを行った上で調査を実施した。

本調査の調査対象者の属性は、表 1 の通りである。本調査では男女比と年齢構成は国勢調査に基づいて割り当てを行っているが、それ以外の項目については割り当ては行っていない。さらに、本稿で用いるデータに関しては無作為抽出が行われていないため、偏り⁷⁾がある可能性が高いことを考慮した上で、調査結果を検討していく必要がある。

2.2. 使用変数

前節での承認に関する意識の操作化の議論を踏まえて、本調査では人々の社会からの承認に関する質問を「社会は私のことを受け入れてくれる」とし、選択肢は「1. まったく感じない」から「5. とてもそう感じる」の 5 段階で調査対象者に回答を求めた。本稿ではこの質問に対する回答データの分析を通して、現代社会における社会からの承認の実態を捉えることを試みる。

また、社会からの承認の世代ごとの差について検討するため、分析の際には調査対象者の年齢を 10 歳ごとに区切り、20 代から 60 代までの 5 つのカテゴリに分類し用いた。そして、それぞれの世代ごとに社会からの承認に対する回答がどのような傾向にあるのかを検討した。

3. 分析

3.1. 社会からの承認の基礎集計と分布の検討

まず、社会からの承認について、その世代ごとの差を記述統計およびクロス集計の結果を表したグラフに基づき傾向を確認する。

社会からの承認の基礎統計量を示したものが、表 2 である。平均値⁸⁾を確認すると、最も値の低

7) インターネット調査の回答者の属性の傾向として、他の調査と比較すると高学歴が多いこと、専門技術職が多く技能・労務職が少ないこと、また、正社員が少なく、非正規従業員が多いこと等が挙げられている（本多 2005）。本調査のデータを考察していくにあたっては、こういった偏りがあることを考慮した上で、分析結果を検討していく必要があると考えられる。

8) 社会からの承認の項目を分析していくにあたり、数値として「1. まったく感じない」に 1 を割り振り、

い20代の2.98ポイントと最も値の高い60代の間では約0.5ポイントの差が見られた。さらに、世代ごとの差が20代と30代の間では比較的小さいものの、30代と40代の間では若干ではあるが差が大きくなっており、20代・30代と40代・50代・60代との間でその回答傾向になんらかの違いが存在する可能性もあると考えられるだろう。

次に、それぞれの世代においてどれくらい回答にばらつきがみられたのかを標準偏差を用いて確認する。標準偏差については世代ごとにそれほど大きな差は見られないものの、20代と40代においては回答のばらつきが比較的大きく、50代においては回答のばらつきが比較的小さいことが確認された。今回の分析においては世代内でのばらつきの要因については検討できないが、今後分析していくにあたっては世代内における承認の差についても考慮していく必要があると考えられる。

さらに、平均値の検討だけではそれぞれの選択肢の詳細な分布が確認できないため、各世代と社会からの承認のクロス集計の結果をグラフ（図1）に表した。図1の結果をみると、やはり平均値の違いを検討した際にも明らかであったように、全体として若年層（20代・30代）が「まったく

表2 基礎統計量（社会からの承認）

	平均	標準偏差	N
20代	2.98	0.927	94
30代	3.08	0.896	116
40代	3.31	0.936	137
50代	3.36	0.796	116
60代	3.45	0.883	137
合計	3.26	0.903	600

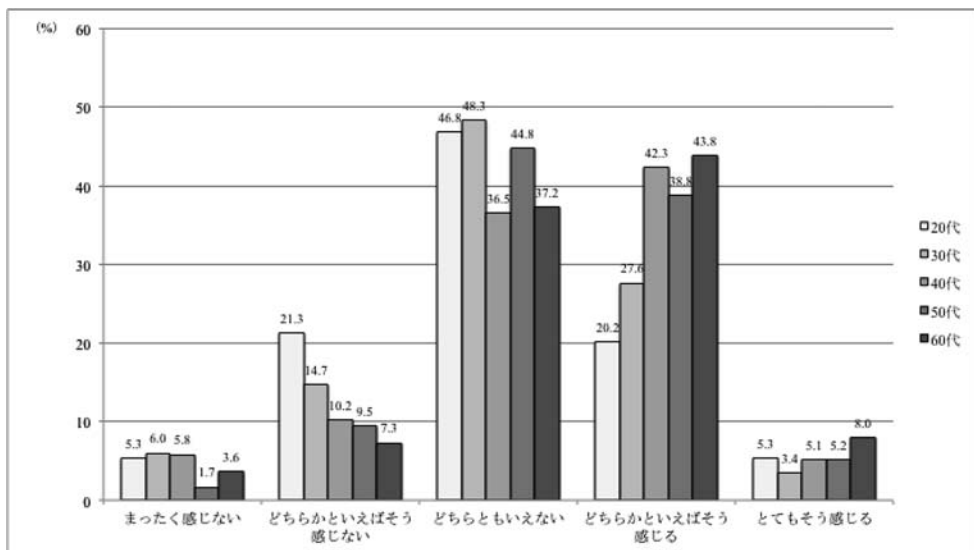


図1 世代別回答分布（社会からの承認）

↘ 「とてもそう感じる」に5を割り振った。

感じない／どちらかといえばそう感じない」を回答する割合が多く、高齢層⁹⁾（40代・50代・60代）であるほど「とてもそう感じる／どちらかといえばそう感じる」と回答する割合が高い傾向が見て取れる。このように全体としては若い世代と比べて年配の世代の方が社会からの承認を感じていると捉えることができるだろう。しかし、ここで世代ごとの社会からの承認の分布を精緻に確認したことで、「どちらかといえばそう感じない／どちらともいえない／どちらかといえばそう感じる」といった選択肢においては、若い世代の方が社会からの承認を感じにくい傾向は見えて取れる一方で、それらの選択肢と比較すると「まったく感じない／とてもそう感じる」に関しては、各世代において一定の割合の人々が、他者からの承認が感じられない、または承認を感じることができるという状況に置かれていることが見て取れる。この点は今後承認の問題を考えていく際に、なぜこのような状況が生じるのかといった点についても考えていく必要があるだろう。

以上、記述統計の確認を通して、世代と社会からの承認との間にはなんらかの関連があることが示唆された。しかし、これらの変数の間になんらかの関連があるとの傾向は見えて取れるものの、それらの差が統計的に有意なものであるかどうかは示されていない。次項においては、統計的な手法を用いてこれらの差が有意なものであるかどうかの確認を行う。

3.2. 平均値の差の検討

前項では記述統計に基づき、世代と社会からの承認との関連についての分布の確認を行ってきた。しかし、記述統計においてはその差が確認されたものの、これらの世代ごとの値の差が統計的に有意な差であるかどうかは確認されていない。そこで、社会からの承認の世代ごとの平均値の差が有意であるかどうかを確認するため、世代と社会からの承認の2変数の関係について分散分析を実施した。その結果、社会からの承認については各世代の間に統計的に有意な差（ $F(4,595) = 5.653, p < 0.01$ ）があることが示された。さらに、この結果を踏まえ、どのグループ間で有意な差があるのかを確認するため、Tukey法を用いて多重比較を行った。その結果、20代と40代、50代、60代の間に、そして、30代と60代の間に統計的に有意な差があることが確認された¹⁰⁾。これらの結果から、先行研究で言及されてきた承認に関する問題と世代との関連は、本稿においては20代・30代の若年層と40代・50代・60代の高齢層との間で有意な差があり、現代社会において若年層は高齢層と比較すると社会からの承認を感じにくいといったことが示されたと考えられるだろう。

以上、本節の分析を通して、社会からの承認は高齢層と比較すると若年層において、有意に低い傾向が示された。これらの結果から、社会からの承認を感じるかどうかの要因を考えていくにあたり、一要因として年齢が影響を与えている可能性が示唆された。次節の4節においてはこれらの結果を踏まえた上で、今後の研究の方向性について検討を行う。

9) 本稿においては便宜上20代・30代を若年層、40代・50代・60代を高齢層とした上で議論を進める。

10) Tukey法を用いた検定において、平均値の差は20代と40代、20代と50代の間においては5%水準で有意であり、20代と60代、30代と60代においては1%水準で有意であった。

4. 考察

ここまでの分析を通して、先行研究で指摘されてきたように高齢層と比較すると、若年層において社会からの承認が低い傾向が見られた。これらの結果から、社会からの承認を考える際の一要因として年齢が何らかの効果を持つと考えられる。しかし、年齢も要因の一つではあるものの、それらは単に年齢による差なのかは慎重に検討していく必要がある。若年層と高齢層を比較した際には、社会的な属性としてそれぞれの就労状況や婚姻状況については、その割合が有意に異なることが予想される。世代と社会からの承認との関連がこれらの他の変数の効果を統制しても見られることが確認されてはじめて、これらは世代による違いだと捉えることができる。そのためには、今後社会からの承認に関して、就労状況や収入、婚姻状況といった人々の社会的な属性も含めたモデルについて、多変量解析の手法を用いて他の変数の影響をコントロールしながら精緻に検討していく必要があるだろう。さらに、これらの社会的な属性だけではなく、承認の問題を考えるにあたっては人々が他者とどのようなつながりを持っているのかといったネットワークの問題も重要な視点となると考えられる。

また、多変量解析の結果として年齢の効果が確認された場合でも、それが純粋な年齢の効果であるかどうかは慎重に検討していく必要がある。今回の調査は一時点における調査であるためになかなかそれらの検討は難しいが、これらの効果が年をとることでその値が変化する加齢の効果なのか(年をとると、社会からの承認を感じやすい傾向がある)、それともある特定の世代において見られる世代の効果なのかといった点は今後慎重に検討していく必要があるだろう。

本稿においては、人々が現代社会に生きる中でどの程度他者からの承認を感じているのかどうかを、社会からの承認に注目した上で分析を行った。本稿では、社会一般の人々からの承認である社会からの承認の問題について検討を行ってきたが、今回の分析では検討が行えていない「周囲からの承認」も私たちが生活する中では重要な問題だと言えるだろう。今後は社会からの承認の問題のみではなく、周囲からの承認のモデルについてもさまざまな社会的な属性との関連を検討していく必要があるだろう。さらに、社会からの承認と周囲からの承認それぞれの規定因を明らかにするとともに、これらの2つのモデルがどのような関係にあるのかといった点も含めて検討していくことが、現代社会における承認の問題を明らかにするためには不可欠な視点であるだろう。周囲からの承認が満たされなければ社会からの承認も感じにくいのか、それともそれぞれの承認のモデルは独立したものでありどちらかが満たされれば人々にとっての承認は十分に満たされるのかなどさまざまな承認のあり方が存在することが予想される。今後の研究においては承認の問題を通して、現代社会における他者との関係性のあり方についても検討していきたい。

参考文献

- Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, New York & London: Routledge. (= 仲正昌樹監訳, 2003, 『中断された正義——「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房).
- Fraser, Nancy und Honneth, Axel, 2003, *Umverteilung oder Anerkennung?*, Frankfurt: Suhrkamp. (= 加藤泰史監訳, 2012, 『再配分か承認か?——政治・哲学論争』法政大学出版局).

- 源氏田憲一, 2013, 「承認の格差と社会経済的地位——JGSS-2012による分析——」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』[13]: 13-24.
- 本多則恵, 2005, 「社会調査へのインターネット調査の導入をめぐる論点——比較実験調査の結果から」『労働統計調査月報』57(2): 12-20.
- Honneth, Axel, [1992] 2003, *Kampf um Anerkennung: Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (= 山本啓・直江清隆訳, 2014, 『承認をめぐる闘争 [増補版] ——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局).
- 萱野稔人, 2007, 「『承認格差』を生きる若者たち——なぜ年長世代と話がとうじないのか——」『論座』7月号: 55-61.
- 大澤真幸・平野啓一郎・本田由紀, 2008, 「座談会〈承認〉を渴望する時代の中で」大澤真幸編『アキハバラ発——〈00年代〉への問い』岩波書店.
- Taylor, Charles, [1992] 1994, "Politics of Recognition," Amy Gutmann, ed. *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton: Princeton University Press. (= 佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳, 1996, 『マルチカルチュラリズム』岩波書店: 37-110).
- 山竹伸二, 2011, 『「認められたい」の正体 承認不安の時代』講談社.